

パラレルワールド

第6回

フードコートでハンバーガーとフライドポテトを注文した後、呼び出しがかかるまで、加奈子と裕彦はテーブルで待つことにした。

裕彦はぶつぶつと喋っていたが、加奈子は特に気にしない。良平と親子の会話をしているのだ。

どうやらこの世界と向こうの世界の違いについて話し合っているらしく、色だの、おいだのと
言っていた。

まあ、何が違っていたとしても、それを確かめることができるのは裕彦だけなので、あまり意味のない会話のようにも思えたが、加奈子は敢えてそのことを指摘しなかった。たぶん、良平は純粋に息子との対話を楽しんでいるのだろう。

突然、裕彦は無言になった。表情も硬く、緊張状態にあるようだ。

加奈子は不安に襲われた。明らかに空気が変わったことが感じ取れた。

「あのおじさんも僕と同じなの？」裕彦が言った。
あの男が良平と裕彦に近付いてきた。

加奈子は直感した。

もし、加奈子の直感が正しいなら、今二人は極めて危険な状況にあることになる。

何かわたしにできることはないかしら？

加奈子はとりあえず周囲を見回した。

怪しげな人物はいないような気がしたが、確信は持てない。

「ヒロ君、声出さないで、首を使って答えて。ほんの少しだけ動かすのよ」

裕彦は微かに頷いた。

頭のいい子だわ。

加奈子は裕彦を誇りに思った。

裕彦は二つの身体を別々に動かすことは多少はできるのだが、どうしても同時に同じことを話してしまうらしい。だから、今喋るのはまずい。だが、微かな身振りなら、相手に気付かれない可能性が高い。

「今日見た怪人がお父さんとヒロ君の近くにいる

の?。」

裕彦は頷いた。

やはりそうだ。

「こっちにはいる?。」

裕彦は首を振った。

よかった。

加奈子は少し安心した。だが、気を抜いてはいけない。隠れてこっちを見張っている可能性もある。

「いい。お父さんの言う通りにするのよ。絶対に勝手に動いては駄目よ」

裕彦は頷いた。

加奈子はなんとか良平と意思の疎通を行う方法はないかと考えた。だが、どうしても思い付かない。

こんなことなら、喋らなくても意思を伝えられる合図のようなものを裕彦に教えておけばよかったと思っただが、もちろん今からでは手遅れだ。

裕彦の身体がぐらぐらと揺れた。

向こうの世界で激しく動いているので、こっち

の身体も影響を受けているのだ。

加奈子の不安はさらに強くなった。

おそらく良平と裕彦は走って逃げようとしている。

しかし、あいつの得意技は事故に見せ掛けて殺すことだった。良平たちが急に走り出したということはあいつに誘導されている可能性がある。もちろん、良平だってそのことは知っている。だが、敵は相当な経験を積んでいるのかもしれない。良平はこういう人間を相手にするのは初めてだ。簡単に敵の術中にはまってしまうかもしれない。

「ヒロ君、急に走っては駄目！ 周りをよく見て！ 危ないものはない？」加奈子はなんとか不安を抑えて、大声にならないように言った。

裕彦は目を見開いた。

「どうしたの？ 何かあったの？」加奈子は裕彦の肩を掴んだ。

「あっ！」裕彦は叫んだ。

「何？ 大丈夫よね？」

突然、裕彦は白目を剥くと、がくと頭をテー

ブルの上に落とした。

「ヒロ君！ ヒロ君！」加奈子は半狂乱になって裕彦の身体を揺すった。

周りに座っていた客たちが加奈子の様子に気付いて、がやがやと喋り始めた。

だが、そんなことなど構ってられない。加奈子は裕彦の名前を呼び続けた。

「どうかされましたか？」スーパーの男性店員が近寄ってきた。加奈子の様子にただならぬものを感じたのだろう。

「ええ。それが……」

加奈子はどう答えたものだろうかと思った。事態が急を要するものであることはわかっていた。

だが、こちらの世界で救急車を呼んだところで、何か意味があるのだろうか？ 今、裕彦が意識を失ったのは、十中八九、向こうの世界で、あの犯人に襲われたことが原因だ。きっと、事故に見せ掛けた罫わなに掛けられたのだろう。だが、それはあくまで、向こうの世界で起こったことだ。この世界では、裕彦は事故には遭っていない。向こうの

世界で救急車を呼べば適切な治療が行われることだろうが、この世界では対処のしようがないのではないか。

もしそうだとしたら、騒ぎ立てない方がいいのかもしれない。もし目立ったら、こっちの世界でもあいつに気付かれてしまうかもしれない。もちろん、こちら側では事故に遭わせられることはないだろうが、なんらかの危害を加えられる可能性がある。

いえ。たいしたことはないんです。昼間あんまりはしゃぎ過ぎて、食事中に眠り込んでしまったんです。

そう言って、誤魔化してもいいのかもしれない。悩んだのはほんの一瞬だった。

「この子、突然意識を失ってしまったんです。救急車を呼んでいただけですか？」

確かに、こちらの世界で治療をしても効果はないかもしれない。だが、絶対に効果がないとは言えないのだ。二つの世界の仕組みについては、何もわかっていないのだから。それに、ひよっと

したら、本当にこちらの世界での病変が原因なのかもしれない。このまま裕彦を放置して、もし死んでしまったら、一生後悔することだろう。無駄かもしれないが、できるだけのことにはしたい。

「救急車ですか？」

「ええ。救急車です」

店員は迷っているようだった。店に救急車がやってきたら、変な噂うわさが立つかもしれない。店としては、なるべく救急車を呼びたくないのだろう。もちろん、本当に急病だった場合、救急車を呼ばないこと自体が非難されることになる。患者の病状を見極めることが重要だと考えているのだろう。

「こんなことはよくあるんですか？」

「いいえ。初めてです」

この店員は何が言いたいんだろう？　こういう持病じゃないかと思ってるのかしら？

「眠ってる訳じゃないですよね」店員は尋ねた。

「眠ってたら、揺すられてとっくに目を覚ましています」

「ふざけてるってことはないですよね？」

「わかりました。自分で救急車を呼びます」加奈子は携帯電話を取り出した。

「ああ。その必要はありません」店員は慌てているようだった。店が救急車を呼ぶ必要がないと判断して、客の携帯から救急車を呼ばれたりしたら、あとで言い訳することが難しくなる。そんなことになるぐらいだったら、思い切って、救急車を呼んだ方がましだと思いつたのだろう。

ほどなく店員が呼んだ救急車がやってきた。

もちろん、救急隊員には本当のことは言わない。別の世界でこの子の分身が事故に遭ったのだと言えば、加奈子自身が入院させられてしまうはめになってしまいかもしれない。

加奈子は客観的な事象のみを伝えた。

はい。食事ができるのを待っているときに、突然意識を失ったのです。何も食べていなかったの
で、食事が喉のどに詰まったとか、誤飲したとかいうことはありません。持病は特にありませんでした。脈拍や呼吸にも異常は認められなかった。

病院に着くと、脳波、心電図、レントゲン、血

液検査など様々な検査が行われたが、異常は発見されなかった。

「一番似ているのは、睡眠をとっている状態です」医師は困惑しているようだった。「脳にも、神経系にも、循環器系にも、呼吸器系にも問題はありません。お子さんが意識を失っている理由が全くないのです」

「はい」加奈子は黙って頷くしかなかった。

裕彦が意識を失っている理由ははっきりとわかっている。しかし、そのことを医者に教えても信じて貰えないし、万が一信じて貰ったとしても、打つ手は一つもないのだ。

「その、言いにくいのですが……」医師が話を続けた。

「はい。何でしょうか？」

「詐病という可能性はないでしょうか？ 寝たふり、つまり狸寝入りたぬきねいをしているとか」

「六歳の子に何時間も寝たふりを続けることが可能だと思われませんか？」

「もちろん、そんな可能性は殆どほとんどないということ

は理解しています。また、脳波パターンの説明も難しい。しかし、それが一番ありそうな仮説なんですよ」

「脳波は覚醒状態とは違うんですか？」

「はい。はっきりしたことは言えませんが、これもまあ睡眠状態に似ていますね」

これは朗報なのかしら？

加奈子は迷った。

向こうの世界でも裕彦は死んでいないということ？ 単に意識を失っているだけということ？

しかし、二つの世界の一方で分身が死んでしまった場合、もう一方がどのような状態になるのか全くわからないのだ。ひよっとしたら、今の裕彦のように意識不明状態が続くのもかもしれない。あるいは、片方の肉体が死ねば、もう片方も連動して死んでしまうのかもしれない。あるいは、単に二つの世界の繋がりが途切れ、普通の一人の人間に戻れるのかもしれない。今まで前例のないことであり、何が起こるかは全くわからないのだ。

とりあえず、異常は見られないまま二十四時間が経^たった。

意識が回復しないため、裕彦は点滴から栄養を補給することになった。今後もし意識を回復しない場合、点滴だけでは必要な栄養を賄^{まかな}えないので、経鼻チューブによる栄養補給を行う必要が出てくるだろうと言われた。

加奈子は了承するしかなかった。

呼吸は正常なため、酸素吸入も人工呼吸も必要なかった。ただ、ベッドの上で眠り続けているだけだった。

これは治療と言えるのかしら？　ただ、眠っているだけなら、家に連れて帰ってもいいんじゃないかしら？

ただ、家に連れて帰ることに不安もあった。

もし、不測の事態が起きた場合、病院にいた方がなんらかの処置が可能かもしれない。それに、犯人はこちら側の裕彦の命も狙^{ねら}わないとは限らない。家に連れて帰った場合、常に加奈子が見張っていると、という訳にもいかない。医師や看護師の目が届

く病院の方がまだ安心かもしれない。

そして、数日後、買い物をしているとき、病院から連絡があった。

「お子様の意識が回復されました」

「本当ですか？　ありがとうございます。すぐに参ります」

「はい。ただ、少し混乱されているようで、すぐにお母様に言わなければならぬことがあるとおっしゃっておられます」

「はい。混乱しているんですね。わかりました」
病院のスタッフが裕彦の言動を混乱と捉とらえるのは、全く想定内だ。

加奈子は大急ぎで、病院へと向かった。

「担当看護師によりますと、今日の朝十時頃ごろ、突然目を開けて、すぐに『お母さんは大丈夫か』と尋ねたそうです。どうやら、一緒に事故に遭ったと思っっているようです……」

さっさと病室から出て行って、わたしと裕彦の二人つきりにして、と何度も喉まで出掛かったが、なんとか飲み込んだ。医者としては、病状を説明

する義務があるのだろう。だが、どうせ説明できないことはわかってる。昏睡こんすいの原因も不明なら、覚醒した原因も不明のはずだ。なにしろ、原因はこの世界にないのだから。

たっぷり三十分も意味不明の言葉で説明した後、医師は出ていった。

「お父さんは大丈夫なの!？」加奈子はまず良平の無事を確認した。

「うん。お父さんも怪我けがをして入院しているよ」裕彦に特に苦痛はなさそうだった。

「今、お父さんもそこにいる?」

「今はいない。でも、後でまた来るって言った」

「二人とも、犯人にやられたの?」

「うん。騙だまされて車の前に飛び出してしまったんだ」

「お父さんがそんな簡単に騙されるなんて」

良平は慎重な人間だ。事故に見せ掛けようとしているとわかっている相手の策に簡単に乗ってしまうとは、加奈子には考えられなかった。

「あいつ、頭がいいんだ。お父さんは僕を守ろうとしたんだけど、二人とも車にぶつかってしまっただ」

「あいつに脅されても、逃げたりしてはいけなかったのよ」

「そうじゃなくて、オートバイから逃げようとしたんだ」

「あいつがオートバイに乗ってたの？」

「そうじゃない。オートバイには別の人が乗ってたんだ」

「そのオートバイに撥ねられたの？」

「違うよ。自動車に撥ねられたんだ」

「どういうこと？ よくわからないわ」

「あつ。お父さんが来た」

「あなた、大丈夫なの？」加奈子は良平に呼び掛けた。

裕彦はいつものように通訳に徹する。

（ああ。右脚を骨折した上、一時的に脳震盪のうしんとうを起

こして意識を失ったんだけど、裕彦より少し早く

意識が戻ったんだ）

「裕彦の方はどうなの？」

（裕彦は腕と頭に怪我をして、出血が酷く、しばらく意識が戻らなかつた。だが、輸血の甲斐があつて、もう大丈夫だそうだ。もうしばらく入院の必要があるそうだけど）

「入院している方が安心だわ」加奈子はほっとして溜め息が出た。

（俺もそう思う。いくらあいつでも、医療ミスを誘発させるのは難しいだろうから。まあ、絶対にないとは言えないが、もしできたのなら、俺たちが意識を失っているうちにやってたはずだから、まず大丈夫だと思う）

「犯人は捕まったの？」

（もちろん、捕まつてはいない。俺たちを撥ねたのは、無関係な人物だ。一応、加害者なんだけど、その人物には感謝したいぐらいだ。逃げたりせず、ちゃんと救急車を呼んでくれたんだから）

「その人にとっては、とんだ災難ね。……それで、犯人のことは何かわかつたの？」

（名前は矢倉阿久羅だ。物凄く頭の切れる男だ。）

そっちの世界で見付けても、近付かない方がいい
い)

「本名なの？」

(たぶん。俺たちが死ぬと思って、ぺらぺら喋ったんだ)

「でも、死ななかった」

(毘があると予測していたから、一瞬早く動けたというのが大きい。あと、こっちがめちやくちやに運がよかったというのもあるだろう)

「もしくは、そいつがめちやくちや運が悪いとか」

(もしあいつの運が悪いとしても、それを補って余りある頭脳を持っている)

「どうしてわかるの？」

(あいつはあの日、俺たちに会ったばかりだったんだ。それなのに、俺があいつの能力を推測して、それに対処してくるだろうということを予測していた)

「裕彦の様子からあいつを怪しいと見抜いたあなたも凄いと思うけど」

(だから、あいつはその上を行ったんだ)

「じゃあ、あなたはさらにその上を行けばいいのよ」

裕彦は黙った。

「どうしたの？」加奈子は尋ねた。

「お父さんは考え中だよ」裕彦が言った。

(注意深く分析したら、あいつが二重に罍を仕掛けていることに気付けたかどうかを考えているんだ)

「結論は出た？」

(わからない)

「わからないんだ」

(もし、俺が二重の罍を推測したとしても、あいつはさらにその上の罍を仕掛けてくるかもしれない)

「でも、実際仕掛けてなかったんでしょ？」

(だが、俺にはわからない訳だ。俺はありもしない罍のことを考えて、拳銃の果てに無駄な動きをして、簡単に二重の罍に掛かってしまうだろう)

「なんだか悪い方ばかり考えているみたいだけ

ど？」

（君もあいつに会ってみればわかる。とてつもなく、悪知恵が働くんだ）

「でも、全能じゃない」

（そりゃ全能じゃないさ。神様じゃないんだから）

「そう。あなたと同じ人間なのよ。勝てない訳ないじゃない」

（確かにそうだ。あいつは数分先を知ることができるのかもしれないが、人の心を読むことはできない。だとしたら、俺が何重の罠を想定しているかはわからないはずだ。あいつがそこを読み間違えれば、こちらにも勝機がある）

「こっちが読み間違える可能性はあるけどね」

（よし対策会議だ。こっちのとれる作戦は限られている。ひたすら、逃げ隠れし続けるのか。相手が近付いてくるのを待って、迎え撃つのか。それとも、こちらから撃って出るのか）

「それを考えるのはまだ早いんじゃない？」

（じゃあ、いつ考えるんだ？）

「相手のことをもっと調べてからでもいいんじゃない？」

（なるほど。その手があったか）

「なんだか、心配になってきたわ。今すぐ、できるだけ遠くに逃げた方がいいのかも」

（今のは冗談だ。実はすでにネットで矢倉のことは調べてあるんだ）

「該当者はいたの？」

（一人いた。あのダム災害で九死に一生を得た青年だ。両親をなくし、孤独になったらしい）

「矢倉もあの災害のときに能力を得たの？」

（確証はない。単なる偶然かもしれない）

「偶然だなんて考えられないわ」

（偶然でないとしても、原因はわからない。生死の間を彷徨さまようことが重要なかもしれない。それとも、あの地震に何か原因があるのかもしれない）

「でも、そいつの正体がわかったのは大きいわ。

今、どこに住んでいるの？」

（そこまではわからなかった。これ以上、調べる

ためには、探偵か何かを使う必要があるかもな)

「探偵は無理じゃないかしら？ 気付かれたら、あいつに殺されてしまうかも。それに、二つの世界、こちら側とそちら側での連携もできないし」

(あいつは世界Aと世界Bと言ってた。そっちがAで、こっちがBらしい。探偵をする人物は二つの世界について、正確に把握している必要があるだろうな)

「だったら、探偵になるべき人間は限られてくるわね」

(ああ。極めて限定的だと思う)

「すみません。ここ矢倉さんのお宅で間違いないありませんか？」良平は犬の散歩をしている老人に声を掛けた。

矢倉の現住所が見付からなかったため、良平はとりあえず実家近辺で聞き込みを始めることにしたのだ。

「えっ？ ああ。そうだよ。だけど、家はほぼ全壊でね。中にいた子は助かったそうだけど、ここのご夫婦は出掛けていて、流されたんだ。相当下流で見付かったらしいよ」

「子？ 子供さんですか？」

「ああ。そうだよ。まあ、子供って言ったって、二十歳はとっくに超えてたはずだけどね」
「だったら、子供じゃないよな。」

良平は思わず、突っ込みそうになった。

「だけど、この人から見たら、俺ぐらいになって
も、まだ子供なのかもな。」

「矢倉さんに何か用事かい？」老人は気さくに尋ねてきた。

「ええ。阿久羅君と知り合いで、少し近くに寄ったものですから」

「相当仲がいいんだね」

「えっ？」

「いや。普通の知り合いだったら、近くに寄ったからと言って、家を訪ねたりはしないだろう。自分も面倒だし、いきなり来られる先方だって迷惑だと考える。だけど、そういうことは気にしなくてもいいし、多少面倒でも会いたいということは相当親しい関係だということだ。特にあんた足が不自由そうだし」

「ああ。これはこの間骨折したのが完治してないだけなんです」

この爺さんじい、割と細かいことに気付くタイプのようだ。

「お子さんかい？」老人は裕彦の方を見た。

「あ。はい」

調査にはある程度危険は伴うのはわかっていた

が、裕彦を一人で置いてくる訳にもいかず、連れてきていたのだ。

「これより山側は子連れでは行かん方がいいよ」

「山側……ですか？」

「去年の鉄砲水から全然手付かずになつとるんだ。道も何もぐちゃぐちゃで、また大雨か地震があつたら、すぐに土砂災害が発生するんじゃないかと心配だね」

良平は山の方を見た。確かにあちこちに崩れた跡がまだ残っていて、非常に荒れ果てた感じだ。道路らしきものも見えるが、人も車も通っていない。

「まあ、市街地の復興が最優先つてことなんだろうが、山の方にも少しは手を入れて貰わんと、怖くて麓ふもとに住んでられんわ」

「皆さん、ここに残っておられるんですか？」

「いろいろだな。出ていく者もおるし、ここにへばりついとる者もある。まあ、へばりついているのは、だいたいわしみたいな年寄りだけだな。若いやつはまあ出ていくだろうな。仕方がない。こ

これまでの災害が発生すると、再開発よりは移住の方がてっとり早いからな」

自分が住んでいた辺りはそこそこ市街地だったけれど、これからどうなるんだろうな。

良平は思った。

まあ、持ち家じゃなかったから、あまり深くは考えてなかったけど、あの街はもうなくなるんだろうか？ それとも、新たに生まれ変わるんだろうか？ どっちにしても、住人たちの考え方一つなんだろうな。

「阿久羅君はどこに行かれたか、ご存知ですか？」

「確か、いったん入院したけど、すぐに退院したんだ。それから仮設住宅に住み始めたそうだ」

「今でも仮設住宅に？」

「それがいろいろ問題があってね」

「問題？」

「いや。たいしたことじゃない。言葉が二重に聞こえるとか、一人の人間が二人に見えるとか、そんな妙なことになったらしい。それから、テレビの野球やサッカーの試合で賭け事^かをしようと誰^{だれ}彼^{かれ}

構わず持ち掛けて、鬱陶うっとうしがられていたらしい。当然だ。そんな違法なことをしなくったって、サツカーくじや馬券を買えばいいんだから」

人物が二重に見えたり、言葉が二重に聞こえるのは、裕彦も苦しんだ症状だ。裕彦は一週間もしないうちに慣れてしまったが、それは裕彦が子供で適応能力が高かったおかげかもしれない。すでに成人していた矢倉がこの状況に慣れるまで、相当かかったのではないだろうか？ また、賭けを持ち掛けたのは、二つの世界の時間差を利用して、金儲けを企たくらんだのだろう。まあ、ギャンブルがこの能力の一番簡単な使い道だ。だが、時差が一、二分だと公営ギャンブルに使い辛づらかったので、私的なギャンブルに使うとしたのだろう。しかし、実際日本はギャンブル天国と言ってもいいぐらい様々な合法ギャンブルが存在している。わざわざ矢倉の口車に乗る人物はいなかったのだろう。仮にいたとしても、しばらくすれば、矢倉の勝率に気付いたはずだ。相手は、何か不正が行われているか、もしくはとてつもなく強運だと、判断する

だろう。どちらにしても、矢倉の相手をする者はすぐにいなくなる。

「その後はどうなったんですか？」

「仮設住宅から姿を消した。だが、たまに見掛けるといふ話も聞く。なんでも、堅気じゃなさそうな雰囲気だったって言ってたな。いつも、おかしな風体をした輩やからとつるんでいて、大金を受け取っていたという話も聞く」

やはり、矢倉は単なる快樂殺人鬼ではなく、プロの殺し屋である可能性が高そうだ。

やつは二つの世界の時間差を利用することによって、世界Bでは一、二分先を予知できる人間になれるのだ。まともな人間なら、可能だとしてもそんな仕事を始めたりしないだろう。だが、やつは違っていた。金のために能力を活用し出したのだ。

全く恐ろしいやつだ。

良平は心底ぞっとした。

あいつは、保身のためなら、物凄く簡単に自分たち親子を殺そうとするだろう。いくら、おまえ

の邪魔はしないから殺さないでくれと懇願したところ、あいつは聞く耳を持たないと思われる。俺たちを生かしておいても何の得もない。そう思えば、あいつは躊躇ためらうことすらせずに殺人を実行するだろう。

だが、矢倉自身も気付いていない事実がある。裕彦には使い道があるのだ。あいつのやろうとしていることにうってつけかもしれない。もしあいつがこの事実を知ったなら、裕彦を殺そうとすることは止やめて、仲間にならないかと打診してくるかもしれない。そうすれば、もはやあいつに命を狙われることはなくなるだろう。

だが、その事実をあいつに知らせる気はなかった。それを知れば、あいつはほぼ間違いなく、裕彦を自分の同類にしようとするだろう。良平は自分の子供を怪物にするつもりは全くなかった。

良平は老人に礼を言い、人通りの少ない場所に裕彦を連れていくと、静かに呼び掛けた。

「お母さんと話がしたいんだ。そこにいるのか

「うん」

いつものように加奈子との会話が始まる。

「矢倉の正体がわかってきた」

（こっちでも、だんだんわかってきたわ）

「こっちでは、やつは殺し屋をしているらしい」

（想像通りね）

「そっちでは何を？」

（よくわからないけど、たかり屋みたいなことをしてゐるらしいって噂よ）

「たかり屋？」

（他人の秘密を嗅ぎ付けて、それをネタに強請^{ゆす}らしいわ）

「どういうことだ？ 予知能力とはあまり関係がないようだけど」

（こっち——世界Aではそもそも予知能力なんて持ってないのよ）

「しかし、たかり屋というのは不思議だな。そっちの世界では千里眼か透視能力が使えるとかかな？」

（そんな能力があるのなら、そっちみたいにもつ

と凄いことに使いそうだけど)

「確かにそうだな」良平は考え込んだ。「こっちの世界に何かの秘密があるのかもしれない。もう少し調べてみるよ」

(わたしの方ももう少し調べてみるわ)

「君の方はもう調べなくていいよ」

(どうして?)

「あいつは危険すぎる。こんな子供ですら殺そうとしたんだ」

(それを言うのなら、わたしよりあなたの方がもっと危険な状況よ)

「俺なら腕力では対等に戦える」

(あいつは人を殺すのに腕力は使わないんでしょ?)

「それはそうだが……」

(あいつは用心深いから直接手は下さないんでしょ?)

「それも推測に過ぎない。もしあいつが絶対にばれないと確信したら直接手を下すかもしれない」
(わたしを殺してもあいつに得はないんじゃない)

かしら?)

「決め付けはできるだけなくした方がいい。あいつが損得で行動しているかどうかはわからない。そして、論理的に行動しているかもわからない。

確かに、今までは随分慎重に行動しているように見える。だけど、人間というものは、突然突拍子もないことをしてしまうものだ」

(あいつが衝動的な行動をとれば、普通に証拠が残って逮捕されるかも)

「あいつが逮捕されたとしても、君や裕彦の身に何かあったら、取り返しが付かない。あいつには絶対に近付かないでくれ。君が調査していることがばれることも危険だ。調査もここまでにするんだ」

(ええ。わかったわ)

加奈子は納得したような返事をしたが、どうも信じ難かった。彼女はそう簡単に諦めるあきらような人間ではない。かと言って、別の世界にいる加奈子を止める手段は何もなかった。彼女の身の安全を守るには、一刻も早く矢倉の弱点を見付け出し、

あいつを無力化するしかないのだ。

それから調査を続け、良平は矢倉が高級マンションに住んでいることを突き止めた。矢倉はちやんとした仕事をしている様子はなかった。夜はあちこちの高級クラブで飲み明かし、昼間は高級車を取り回し、女をとつかえひつかえしているようだった。一年前までただのニートだった男が特に事業を立ち上げた様子もないのに、突然贅沢ぜいたくざん三味の暮らしを始めたとしたら、何か非合法的な金儲けを始めたに違いないと誰もが思うことだろう。

その非合法的な金儲けとはつまり殺し屋なのだと、良平は確信していた。と言っても、矢倉が依頼主と接触するところを直接押さえた訳ではなく、彼の殺人現場に行くわした訳ではない。ただ、彼のテリトリーであろうと思われる地域で、異常に事故の発生が多いのは客観的な事実であった。それは決して偶然ではありえない確率だったが、それをもって矢倉を殺し屋だとする根拠にはならない。

おそらく警察だって、彼の派手な生活と事故遭

遇率の高さには気付いているだろう。だが、彼は決して証拠を残さないため、逮捕することができないのだ。状況は絶望的に思えた。

どうして、俺たちはこいつに出会ってしまったのだろうか？

良平はあの日あの場所に行ったことを悔いた。

だが、本当にもしあの日あの場所にさえ行かなかったら、あいつと無関係な人生を歩むことができたのだろうか？

いや。そう考えるのは楽観的に過ぎるだろう。

あいつは二つの世界を同時に認識できるという以外にも特別な才能と異常な人格を持っている。あいつは、裕彦が自分とよく似た能力を持っていることをほぼ瞬時に見抜いていた。あのときでなくとも、俺たち家族はいつかどこかであいつと出会っていたことだろう。あいつと対峙たいじしなければならぬのはほぼ運命だと言ってもいいかもしれない。

（こっちの世界では、あまり贅沢はしていないよ

うよ)

数日後、加奈子が裕彦を通じて連絡してきた。

「あいつのことは放ほうっておけと言ったじゃないか」

(そんなこと言ったって、何もしない訳にいかないじゃない。それに、もう調べちゃったんだから、あなたが聞かなかったら、わたしの苦労が全部無駄になっちゃうわ)

「わかったよ。そっちの世界での矢倉はどんな様子なんだ？」

(安アパートに住んでいるわ。だいたいは、近くのコンビニで、食料と酒を買ってるみたい。外では食事をしないようよ)

「なるほど。こっちの世界で殺し屋をしていくくらい稼いでも、金をそっちに持っていくことはできないからな」

(で、働いている様子はないの。前にも言ったように、近所の人によるとたかり屋みたいなことをしているらしいわ。何度か暴力団みたいな人たちがやってきて、大声で怒鳴り合いをしている内容

でわかったって)

「たかり屋か……なるほど。そういうことか！」

(何か気付いたの?)

「こっちの世界から物質をそっちの世界に持っていくことはできないんだ」

(それは気付いていたわ)

「だが、持っていけるものはある。情報だ」

(ああ。そういうことか。そっちの世界で情報を
掴めば、自動的にこっちの矢倉の頭に入る訳ね)

「殺し屋だから、闇社会やみとも繋がりがあって、強
請りのネタになりそうな情報が手に入りやすいん
だろう。ときには、金で買ったたりするのかもしれ
ない」

(その情報を使うのはこっちの世界でだから、絶
対に足が付くことはない)

「殺し屋程は儲からないだろうが、食っていく
だけなら、それで充分なんだろう。あまり高額を
要求すると、報復されたり、警察に通報されたり
するだろうから、そこそこの端金はしたがねで妥協してるん
だろうな」

(そんなことをするなら、ちゃんと働けばいいのに)

「やつは働く気なんか無いと思うよ」

(殺し屋稼業で楽しんで儲けることを覚えたから?)

「彼は殺し屋になる前からずっとそうだったんだ。両親の収入を当てにして、自分は働いていなかった。世の中には、なんらかの理由で働くことができない人は大勢いると思うけど、彼はそうではなかった。やつの行動力を見る限り、精神的な弱さは全く感じない。やつは心に傷を負っていた訳でも、氣力を失っていた訳でもなかったんだ。ただ、自分で額に汗して働くことを馬鹿にしていたんだ。そして、他人の命を奪うことで収入を得られるなら、喜んで殺人を犯す」

(いったいどうすればいいのかしら? 警察に通報する?)

「それは難しいな。おそらく警察もあいつの周辺で死亡事故が多過ぎることに気付いているはずだ。だが、意図的に事故を発生させているという証拠でもない限り、逮捕することはできないだろ

う」

（じゃあ、証拠を作ってしまったら、どうかしら？ 濡れ衣ぬれぎぬを着せる訳じゃないんだから、許されると思うわ）

「人道的には許されるけど、法的にはアウトだよ。そもそも、二つの世界が存在することは立証できないんだから、もし発覚したら、矢倉を無実の罪に陥れるための証拠捏造ねつぞうだということになってしまふ」

（二つの世界の存在は実証できるわ。現に、わたしたちの前で裕彦が実証してくれたじゃないの）
「俺たちが試した方法はあのときだから、意味があつたんだ。今、同じことをしても親の仕込みだと思われてしまふよ」

（だったら、この世界にいる人間が知り様のないことを言ったら、どうかしら？ そっちの世界でしか起こってこない出来事をこっちの世界で話すの。そして、その逆もする）

「裕彦がこっちの世界でしか起こってないことをそっちの世界で話したって、そっちの世界では確

かめようがないじゃないか」

（だったら、どちらかの世界ではもう死んでいる人に話を聞いて、もう一方の世界で誰も知らなかった秘密を話して貰うというのはどうかしら？たとえば、誰にも知らせていない場所に宝箱を隠したとか）

「まず協力者を探すのが大変だ。その人に正直に目的を話すか、それとも適当な理由をでっち上げて、今まで誰にも言わなかった秘密を教えて貰わなければならない。そして、苦労して手に入れたその秘密をもう一方の世界で明かしたとしても、なんらかの手段を使って調べたと思われるだけだ」

（じゃあ、どうすればいいのよ！）

「矢倉に俺たちに危害を加えることを諦めさせるんだ」

（そんなことできるの？）

「なんとか考えるんだ。あいつの秘密を握って脅すだけでいいのかもしれない」

（どんな秘密があるの？）

「それを今から調べるんだよ」

(雲を掴むような話ね)

「だが、それしか方法がないんだ」

(どうやって、調べるの?)

「それも今から考える」

(両方の世界で協力した方がいいんじゃないかしら?)

「絶対に駄目だ！」良平は不安に襲われた。「君はもうあいつに近寄ってはならない。約束してくれ」

(わかったわ。あいつには近付かない)

だが、良平の不安は収まらなかった。

陰鬱な雲空の下、加奈子は裕彦を連れて、矢倉家の残骸ざんがいを訪れていた。今月に入って、もう五度目か六度目になる。

残骸の中に矢倉と戦うための材料がないかと探すためだ。

もちろん、良平との約束を忘れた訳ではない。だが、加奈子が調べているのはあくまで残骸だ。矢倉自身に近付いている訳ではない。

ぐしゃりと潰つぶれた全壊した家に近付くたびに加奈子は強い吐き気を覚えた。裕彦と共に恐怖さいなに苛まれたあの時間を思い出してしまふのだ。

あの災害で、加奈子と良平は互いを失ってしまった。ただ、今は微かに裕彦を通じてのみ、二人は繋がっている。裕彦は二重の意味で加奈子の生き甲斐になっていた。裕彦を通じて良平の存在を感じていなければ、彼女は生きてなぞいられなかっただろう。

加奈子は吐き気を飲み込んで、瓦礫がれきの山に近付いた。

「ヒロ君はここで待っていて」加奈子は裕彦の手を放すと、残骸の中に足を踏み入れた。

すでに一年以上放置されているため、付近も残骸の中も雑草が生い茂っていた。そして、泥が何層にも流れ込んでいて、いろいろなものが腐敗し、強い臭気を放っていた。おそらく、鼠ねずみや様々な昆虫の巣ができているだろうし、最悪、毒蛇すずめばちや雀蜂のような危険な生き物も潜んでいるかもしれない。懐中電灯で崩れ落ちた屋根の下を照らす。

まだそこには生活の跡が残っていた。テレビや冷蔵庫のような電化製品、箆筒たんすや食卓などの家具、食器や雑誌なども散乱していた。食品はとうに腐敗してしまっているのだろうが、なんとなく泥の集積こんせきが痕跡のように思えてくる。

ぽつりぽつりと雨が降り出した。

空を見上げると、真っ黒な雲が渦を巻くように上空を漂っていた。

突然、雨は大粒のものに変わった。

今日はもう帰った方がいいかもしれないわね。

加奈子は折り畳み傘を見付けるため、鞆かばんの中を探った。

「雨の日なのに、ご苦労さんだね、奥さん」男の声がした。

加奈子は顔を上げた。

髪ひげも伸ばしっ放しにしている若い男が少し離れた場所からこつちを見ていた。地味な服装で、その上あまり洗濯していないのか、あちこちに染みができていた。

加奈子の鞆を探る手が止まった。

加奈子はその男の顔を見るのは初めてだったが、何者であるかは即座にわかっていた。

「やあ、坊や」男は裕彦に手を振った。

加奈子は裕彦の方をちらりと見た後、男を睨にらみ付けた。

「何？ 奥さん、俺が怖いのか？」

「わたしたちに近寄らないで！」加奈子は叫んだ。

「俺が誰か知ってるよな？」

「知らないわ」

「嘘うそはよくないよ。矢倉だよ。俺は矢倉阿久羅。知ってるよな？」

「知らないって言ってるでしょ。向こうに行つて」

「いや。絶対に知らないはずないって、その坊やとも会ってるし。なっ？」

「こいつ、怪人だよ」裕彦が矢倉を指差した。

「ヒロ君、黙って」加奈子が裕彦に言った。

「怪人？俺が怪人？」矢倉はぽりぽりと頭を搔かいた。「参ったな。俺、そんな悪いことなんかしてないんだけどね。むしろ、悪いやつを懲らしめてるんだ。『おまえのやった悪事をばらされたくなかったら、金を渡せ』ってね。だから、まあ俺はどっちかというと、怪人というよりは正義の味方なんだよ。……こっちの世界ではな」矢倉はにやりと笑った。

「脅しても無駄よ。あんたはこっちの世界では予知能力は使えない。だから、わたしたちを殺すことはできないんでしょ？」

矢倉は加奈子の言葉を聞くと、げらげらと笑い

出した。

「何がおかしいの?」

「俺がおまえらを殺せないって? どうして、そんなこと思い込んでるんだ?」矢倉はポケットからバタフライナイフを取り出し、片手で開いた。

鋭い摩擦音が響いた。

「殺したら、犯罪になるわ」加奈子が言った。

「今まで慎重に行動して、直接手を下さなかったことが全部無駄になるのよ」

「おまえ、俺を甘く見てるだろ。そりゃ、もちろん直接手を下さないに越したことはない。けどな、やらなきゃならないときにはやるしかないんだよな」矢倉は手の上でくるりとナイフを回した。

「今では、ここらを人が通ることは滅多にない。

特に今は雨が降っている。まず誰も来ないね」

「でも、死体が残るわよ」

「そこだよな、問題は。でもな、ここでやったら、俺に分があるんだよ。その家、誰のものか知ってるか?」

「家なんてないわ」

「おまえが懐中電灯で勝手に覗き込んでた家だよ!!」矢倉の目が吊り上がった。

「これは瓦礫よ」

「いや。家だ、それも俺の家だ。つまり、おまえは不法侵入者なんだよ。勝手に家に入り込まれたことで俺は激昂げききょうしてパニックになってやつちまった。そういう筋書きでいいんじゃないか？」矢倉はさらに一步踏み出した。

加奈子は裕彦の方へ後退あひずきる。「そんなのは過剰防衛よ」

「そうかもな。だけど、それは死体が見付かった場合の話だよな」矢倉は空を見上げた。「おまえ、天気予報見てきたか？」

「何の話？」

「今日、これから豪雨になるんだよ。……あのときみたいに」

加奈子はまた吐き気を覚えた。

「この地盤はあのととき以来、ぐずぐずになってるんだ。いつ崩壊してもおかしくない。だから立ち入り禁止地区になっている。もっとも、見張り

なんていないから、いくらでも入れるけどな。俺とかおまえみたいに。もし、今日これから土砂崩れが起きたら、死体なんか簡単に隠せるんだぜ」「あんたに、今日土砂崩れが起きるかどうかなんてわかるはずがないわ」

矢倉はにたりと笑った。「もちろん、確實じゃない。だけど、俺の勘だと十中八九あと一時間かそこらでこの辺は凄いことになる。見ろよ。この空の黒さ。怪物が空から覗いてるみたいだ」

加奈子は思わず目を伏せた。

「そうか。空が怖いか」矢倉は愉快そうに言った。

「あのときに旦那だんなが死んだんだってな」

「よく調べたわね」

「おまえだって、俺のこと調べてるじゃないか。

……どうだ？ 旦那がいなくて、夜が寂しいだろ？」矢倉は唇を嘗なめた。「俺が慰めてやってもいいんだぞ」

「それ以上、近付かないで」

「ああ。そう言えば、世界Bでは旦那まだ生きてるんだったな。俺が殺し損ねたやつだ。でも、あ

れだろ？ その餓鬼を使えば、通信することはできるんだろう？ でも、直接は触れないよな。言葉だけで楽しもうにも、子供に淫みだらな言葉を伝えて貰う訳にはいかないから、あんまり楽しめないよな？ それとも、あれか？ 子供にそんなことも言わせてるのか？」

「それ以上、侮辱したら許さない」

「馬鹿か？ よく考えろ。俺はナイフを持っていて。おまえには武器がない上、足手纏あしでまといの餓鬼までいる。ここは降参するのが賢いとは思わないか？」

「その自信はどこから来るの？」

「はったりだと思ってるのか？ ニートにナイフなんか使いこなせないと思ってるだろ？ 残念ながら、俺にはたっぷりと時間があつたんだ。ナイフを使うのなんて簡単さ。ただ、近付いて、腹を刺せばいい。何も難しくない。ただ、普通はびびっちゃうんだろうな？ でも、俺はびびらない。俺は何十人も人を殺している。直接じゃないけど。だけど、人を殺していることは間違いない。

だから、今更びびる要素は全くないんだよ」

「そんなことを言ってるんじゃないわ」加奈子は言い返した。

「じゃあ、何の自信だよ？」

「わたしが武器を持ってないとどうして言えるの？」

「俺がつまらないはったり引っ掛かると思ったら大間違いだ」

「あんたがつまらないはったり引っ掛かるとは思っていない。それにはったりでもない」加奈子は靴を落とした。その手には黒い装置が握られていた。

その装置はばちばちと火花を発生した。

「ああ。スタンガンな」矢倉は馬鹿にしたように言った。

「結構痛いわよ」

「そりゃ痛いだろうな。当てられたら」

「わたしに当てられないと思ってるの？」

「俺のナイフよりうまく扱えるのか？」

もちろん、そんな自信はない。だが、そのこと

をあの男に教えてやる必要はない。

「試してみる？ わたしは構わないわよ」

「そうだな」矢倉は顎あごを摩さすった。「たぶん、俺の方が速いとは思うが、痛いのは嫌だな。やめとか」矢倉はナイフを捨てた。

加奈子はほっと溜め息を吐ついた。

「ナイフを使うのはやめておく」矢倉はポケットから装置を出した。「そして、代わりにこれを使うことにする。これはテイザー銃だ。スタンガンによく似た武器なんだ」

加奈子は裕彦の前に立ち、スタンガンを矢倉の方に突き出し放電を始めた。

「ただ違うところもあるんだ」矢倉はゆっくりと装置を加奈子に向けた。「これは飛び道具なんだよ」

発射音と共に何かが右胸に当たった。

「きゃあああ!!」加奈子は絶叫した。全身が硬直し、スタンガンを取り落とし、その場に倒れた。

矢倉はナイフを拾い上げ、近付いてくる。

「ヒロ君、逃げて……」加奈子はなんとか声を振

り絞った。

「でも、お母さんが……」

「お母さんは大丈夫。あいつはこの世界では人を殺さないはず。……でも、ヒロ君は逃げて。……

お父さんと一緒にあいつをやっつけて」

裕彦は歯を食いしばって頷いた。

「ヒロ君、お母さんを助けたかったら、そこにじつとしていろ。……痛みは一瞬だから心配するな」

裕彦は加奈子のすぐ近くの地面に蹲うすくまった。

「いい子だ」矢倉はすたすたと近付いてくる。

「ヒロ君……」加奈子は泣いた。

矢倉が裕彦の肩を掴んだとき、裕彦は立ち上がり、矢倉の喉にスタンガンを押し付け、放電した。蹲すまっているときに加奈子が落としたのを拾ったのだ。

「がはっ！」矢倉はナイフを取り落とし、仰向あおむけに倒れた。

矢倉がなんとか起き上がったとき、裕彦は大雨の中、崖がけの上へと駆け上っていく途中だった。